



Title	移動・存在を表す尊敬語動詞の変化に関する研究
Author(s)	水谷, 美保
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49102
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 みず 水 たに 谷 み 美 ほ 保

博士の専攻分野の名称 博 士 (文 学)

学 位 記 番 号 第 2 1 6 9 5 号

学 位 授 与 年 月 日 平成 20 年 3 月 25 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第 4 条第 1 項該当

文学研究科文化表現論専攻

学 位 論 文 名 **移動・存在を表す尊敬語動詞の変化に関する研究**

論 文 審 査 委 員 (主査)

教 授 真田 信治

(副査)

准教授 渋谷 勝己 教 授 土岐 哲

論 文 内 容 の 要 旨

上代語以来、日本語の中央語（標準語）の敬語には敬語動詞という形式がある。これは主に、移動・存在、知覚、飲食といった意味に対応している。その中でも、移動（「行く」「来る」）と存在（「いる」「ある」）を表す尊敬語動詞は、上代から現代までの各時代語において必ず複数の形式が存在している。そしてそれは多くの方言においても同様である。

本論文は、「行く」「来る」「いる」を一語で表す尊敬語動詞の変遷において共通に認められる、ある特徴的な変化パターンをめぐって、その実態と要因について考察したものである。

論文は 3 部 9 章構成である。

第 I 部では、敬語の通時的变化の様相、上代から現代までの中央語（標準語）、方言の敬語動詞の概観、移動・存在とそこから派生する意味の定義を行っている。第 1 章では尊敬語動詞を運用する際の基盤となる各時代の敬語運用基準の概観をしている。第 2 章では中央語と方言の敬語動詞の意味・用法を整理、提示するとともに、本論文での問題のありかを示している。第 3 章では敬語動詞が表す移動動詞「行く」「来る」、存在動詞「いる」「ある」の意味と存在動詞から派生した種々の用法について、代表的な先行研究の記述を確認しつつ、本論文でのこれらの意味・用法の定義を行っている。

第 II 部では、尊敬語動詞がある一定の期間を経る中で、その意味領域が変化する尊敬語動詞があることを指摘している。第 4 章では「いらっしゃる」を取り上げ、一つの敬語動詞の意味・用法が拡張していく過程と縮小していく過程を明らかにしている。第 5 章では核となる語は同じながら、接続する形式が異なる「おいで」諸形式の変化の違い、相互の関係を明らかにしている。

第 III 部では、諸方言の移動・存在を表す敬語動詞とその他の尊敬語形式のふるまいについて、大量のデータを用いた俯瞰的視野と臨地調査による記述という微視的な視野から論じている。そして、尊敬語動詞の変化、変容、維持の要因と、敬語項目の変化に働く新たな敬語の運用基準について提示している。第 6 章では国立国語研究所編『方言文法全国地図』第 6 集のデータを利用し、上位者の移動・存在と敬語形式の結びつきを特に敬語動詞に注目しながら明らかにしている。第 7 章では「行く」を表さず、「来る」と存在のみを表す尊敬語動詞の意味・用法に関して、臨地調査の結果を記している。第 8 章では特に一語で「行く」と「来る」、そして存在を表す尊敬語動詞に関して臨地調査を行った結果を示している。最後の第 9 章では本論文で指摘した江戸語・標準語、方言の敬語動詞に見られる変化、

変容、維持の実態とその要因を総合的に論じている。その上で、尊敬語動詞の変化、変容を含め、丁寧語の発達、謙譲語の用法の縮小といった敬語の通時的変化を説明する新しい敬語の運用基準を提示している。

本論文において尊敬語動詞の変化・変容に関わる理由として指摘された点は、次の2点である。1点目として、「来る」は話し手（話し手の視点）の位置が動作主の到達点となることから、話し手自身が強く移動に関わるが、「行く」は動作主の移動に対して話し手自身の関わりが比較的弱い。そのため、尊敬語動詞が表す移動の意味は「行く」よりも「来る」として頻繁に用いられるようになる。その結果、移動の意味としては「来る」のみが捉えられるようになり、移動を表すことは同じながら話し手の関わりが大きくない「行く」が尊敬語動詞の意味領域からはじきだされることとなったのである。2点目として、「来る」は話し手（話し手の視点）の位置が動作主の到達点となり、話し手の存在なくしては成立しえない移動である。そのため、話し手が上位者の移動に直接関わることになる。そうした上位者との直接の関わりは話し手にとっての負担となるため、そのような移動であることをあいまいにしてほかすために尊敬語動詞を受容し、用い続けるのだと考えられる。そのため、「来る」という直接的な動詞を使用した尊敬語形式が避けられる。これに対し「行く」は、話し手は上位者の移動に対して出発点もしくは第三者的な立場になり、移動に直接関わるわけではなく、話し手の存在は必須ではない。したがって、この移動はあいまいにする必要がないため、「行く」という直接形を用いて表されるのだと考えられる。一方、存在の意味が保たれやすいのも「来る」と存在の間に関連のあることが要因である。

論文審査の結果の要旨

尊敬語動詞の意味領域は維持され続けるとは限らず、用いられるにしたがって「行く」を表さない方向へと縮小していく傾向がある。本論文では、尊敬語動詞がある一定の期間を経る中で、その意味領域に共通の変化が生じていることを指摘し、方言の尊敬語動詞に関しても、その変容のありかたに同様の傾向が存在することを明らかにした。

これまで、複数の尊敬語動詞に共通する意味領域の変化・変容に関する指摘や、それに対する説明が与えられたことはなかった。本論文は、その指摘とともに、それを把握する視点を提供し、謙譲表現の衰退、丁寧語の発達といった敬語の通時的変化をも総合的に把握する新たな敬語の運用基準の提示を試みたものである。

確かに、本論文においてその実態が明らかにされた通時的変化や方言における変容は、上代以降現代までの敬語の変化の方向として、従来述べられてきた聞き手重視の運用への移行では説明しきれないものである。敬語の運用基準が、古代語のように年齢や身分といった外的な基準によって決まるのではなく、かつ聞き手重視といった運用によって決まるのでもないとするれば、それは一体何によるのか。本論文は、そこに上位者に対する話し手の関わり方（直接関わるのかそうではないのか）といった主観的な話し手基準が関与するという一つの変化の方向性が存在することを新しく提示したのである。その点において本論文は高く評価できるものである。

もちろん本論文にも問題点がないわけではない。本論文では古代敬語の絶対性に触れ、古代には尊敬語動詞の変化・変容は起こらなかっただろうと述べているのであるが、その検証がまったくなされてはいない。この点に関して、自ら研究を推進する力を持つ申請者の今後の研究に期待したい。

以上のように、本論文は、今後に予想される研究の新しい展開に指針を与えるものとして、博士（文学）の学位を授与するに十分な価値を有するものと認定する。